

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2018.12) 平成30年度:35-36.

子育て中の父親の育児感情と育児に関する出産前教育機会との関連

齋藤 苑香, 三盃 志織, 松原 純菜

子育て中の父親の育児感情と育児に関する

出産前教育機会との関連

齋藤苑香 三益志織 松原純菜

(指導：巻島愛)

緒言

2015年に発表された男性の育児休暇取得率は2.65%である。柳原¹⁾は、父親の育児参加を阻害する要因として、仕事が忙しく育児時間の確保が困難であることや、育児に関する知識・自信の不足による否定的感情が生じていることが報告されている。先行研究では、父親の育児参加により母親の育児負担感や否定的感情が軽減し、家族・家庭への貢献感から父親の健康関連QOLの向上へ直接的に影響することが明らかになっており、父親の育児参加の重要性が示唆されている。また、出産前からの継続的な育児指導が父親の育児参加を促進するのに有効であることが明らかになっている²⁾⁻⁴⁾。しかし、父親の育児感情と出産前教育の受講に関連があるのかについては明らかになっていない。

本研究は父親の育児感情と育児に関する出産前教育機会との関連を明らかにする事を目的とした。

方法

1. 用語の定義

出産前教育：出産前に行われた医療者による教育のうち、育児についての内容が行われたもの。

2. 研究対象：A病院、B病院、C病院の1か月健診を受診した家庭の父親のうち、2つの条件(①母子が同時に退院している、②母子と同居して2週間以上経過している)を満たす父親163名。

3. データ収集方法：平成30年8月27日～10月26日に、研究の主旨を記載した説明用紙、無記名自記式調査票、返信用封筒を研究者又は研究者が依頼した調査施設勤務の看護職が、対象者又はその配偶者に配布し郵送法(留め置き法)で行った。

4. 調査内容：①現在の育児参加の有無②対象の属性(年齢、職業、母子が同時に退院しているか、母子と同居して2週間以上経過しているか、同居人の有無)③出産前教育について(出産前教育受講の有無、出産前に育児知識を得た方法(複数回答可)、受講した出産前教育の内容(複数回答可))④育児感情(荒牧⁵⁾⁻⁸⁾の育児感情尺度、エジンバラ産後うつ病質問票(EPDS)を参考に調査票を作成)10項目について調査した。なお、育児感情については4点法で調査を行った。

5. データ分析方法：基本属性は単純集計を行った。育児感情についての各質問は、点数を単純加算

(反転項目は点数を逆転)して得点を算出し、出産前教育受講群と未受講群に分け、二群比較(統計ソフトSPSSver.22を用いてMann-WhitneyのU検定)した。なお、有意確率 $p < 0.05$ を統計学的有意差ありとした。

6. 倫理的配慮：旭川医科大学倫理委員会の承認後(承認番号18071)、対象者に口頭または書面にて説明し、返送をもって本研究に同意したものとした。

結果

1. 対象の属性

対象者は163名で、回収数55名(回収率33.7%)、有効回答数34名(61.8%)であった。

1) 年齢：図1に示す。

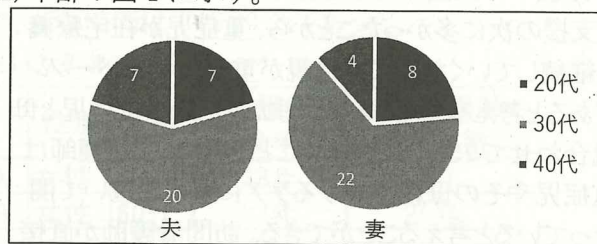


図1. 対象者の年齢

2) 職業：会社員17名(50%)、自営業5名(14.7%)、公務員4名(11.8%)、保育・医療関係3名(8.9%)、その他5名(14.7%)であった。

3) 同居人の子育てサポートの有無：「はい」と答えた人は10名(29.4%)であった。同居人の内訳として、両親、母、義母、義妹であった。

2. 出産前教育受講の有無・受講内容(複数回答)

出産前教育受講群は13名(38.2%)であった。受講内容を図2に示す。

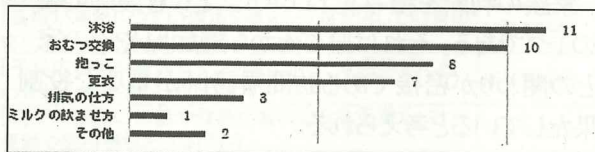


図2. 出産前教育の受講内容(複数回答可)

3. 出産前に育児知識を得た方法(複数回答)

育児知識の取得方法を図3に示す。

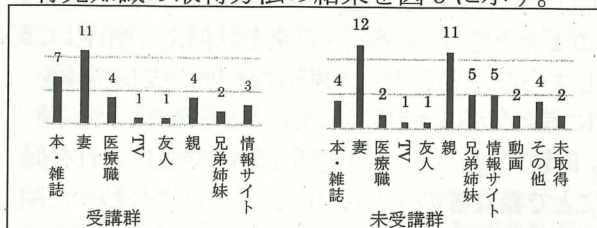


図3. 出産前の育児知識の獲得方法(複数回答可)

4. 育児感情

出産前教育と育児感情については、受講群と未受講群間で有意差がなかった。質問項目の各群の平均値を表1に示す。

表1. 育児感情の質問項目と平均値 (*は反転項目)

質問項目	受講	未受講
*子育てはすることがたくさんあって大変だと感じる	1.46	2.05
子育ては幸せだと感じる	3.85	3.71
*子育てをするようになって自分の時間が少なくなったと感じる	2.15	2.29
*子育てをされていてイライラすることが増えたように感じる	3.00	3.10
子どもの成長を嬉しく感じる	3.92	3.86
*子育ての仕方ですらいらいかかわらず不安になることがある	2.69	2.67
自分の子どもが可愛いと感じる	4.00	4.00
子育てをすることで親であるという実感がわく	3.69	3.52
*子どもが気がかりで、ストレスになっていると感じる	3.46	3.19
子育てをして、自分も父親として成長していると思う	3.38	3.19
合計平均	31.9	31.7

また、同居人の有無で二群比較したところ、【子育てをされていてイライラすることが増えたように感じる】の項目で有意差がみられた。

考察

1. 出産前教育と育児感情の関連

今回の調査では、出産前教育の受講の有無により育児に対する肯定的・否定的感情の差はみられなかった。今回の調査内容では育児参加の状況について不明であるため、育児参加の程度によって育児に関する感情に個人差がみられた可能性があると考えられる。特に、受講群の中でも点数が低かった人は、出産前教育に参加し、子育てについて理解しているからこそ、より育児の大変さを実感し、点数が低くなったのではないかと考えられる。谷野ら⁴⁾は、父親は新生児との早期接触をもつことで意識変化が生じ、育児に対して積極的に取り組める可能性があるとして述べている。今回の未受講群でも、分娩時に立ち会う等の早期接触を行っていた人が、育児に対する肯定的感情を持っていた可能性があると考えられる。

2. 同居人と育児感情の関連

同居人の有無と育児感情では【子育てをされていてイライラすることが増えたように感じる】の項目で差がみられた。高橋は、同居者がいることにより父親の育児負担が軽減する⁹⁾と述べており、妻・自分以外に育児を行う人がいると役割分担を行えることから、父親の育児負担が減ることで精神的に余裕が生じ、【子育てをされていてイライラすることが増えたように感じる】の点数が低く表れたのではないかと考えられる。

さらに高橋⁹⁾は、母親からのサポートにより妻の心的負担が軽減し、児に対する肯定的受容が促進されると述べている。妻の心的負担が軽減すると、精神的余裕が生じ、夫との関係性や夫の育児感情に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

3. 育児に関する情報源

今回の調査で得られた結果から、受講群・未受

講群共に、妻が母親学級で得た知識を夫に伝えている可能性が高いと考えられる。また、妻や妻以外の家族(親・兄弟姉妹)から情報を得ている人が多かったのは、身近で相談しやすいためと考えられる。大塚¹⁰⁾は、遠隔教育における双方向のコミュニケーションにより授業が活性化し、学習効率が高まると述べている。このことから、情報提供者と双方向に言葉を交わすことで、より理解が深まるため、情報源として家族が多かったのではないかと考えられる。したがって、母親学級では妻が得た知識を夫に伝えられるよう、分かりやすく説明・実施を行う必要があると考えられる。

今回の対象集団では未受講群が約6割だったが、同様に出産前教育を受講できていない人も多いのではないかと考えられる。先行研究から、双方向の情報授受が学習効率を高める¹⁰⁾ことから、医療者と双方向に情報授受を行うことで、より効果的に知識を得られると考えられる。よって医療者は、施設開催だけでなく、対象者が自宅で信頼性の高い情報を得ることができ、双方向に情報の授受が出来る方法を考えていく必要がある。

研究の限界

本研究では調査期間が短く、研究対象施設が3施設であり、対象者数も少なかったため、一般化することに限界があった。今後、調査内容を改めて検討し、対象人数を拡大して行う必要がある。

謝辞

本研究にご協力頂いた対象者・病院関係者の皆様、並びにご指導頂いた教員の皆様に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 柳原真知子(2007):父親の育児参加の実態,天使大学紀要,7,47-56.
- 2) 林知里,早川和生(2014):父親の育児参加を予測する要因の検討—単胎児の父親と多胎児の父親へのアンケート調査から—,日本地域看護学会誌,16(3),41-52
- 3) 林知里,岡本愛花,神林優花 他(2012):育児参加は父親にどのような影響を与えるか—多胎児の父親と単胎児の父親との比較—,千里金蘭大学紀要,9,67-75.
- 4) 谷野祐子,小野恵美,朝比奈七緒 他(2007):父親に対する育児指導が母子退院1ヵ月後の父親の育児参加に与える影響,母性衛生,48,90-96.
- 5) 荒牧美佐子(2005):育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—,小児保健研究,6,737-744.
- 6) 荒牧美佐子,無藤隆(2008):育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い—未就学児を持つ母親を対象に—,発達心理学研究,19,87-97.
- 7) 荒牧美佐子,安藤智子,岩藤裕美 他(2007):幼稚園における預かり保育の利用者の特徴—育児への負担感との関連を視野に入れて—,保育学研究,45,157-165.
- 8) 安藤智子,荒牧美佐子,岩藤裕美 他(2008):幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ—子育て支援利用との関係—,保育学研究,46,235-244.
- 9) 高橋有里(2007):乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因,岩手県立大学看護学部紀要,9,31-41.
- 10) 大塚薫(2008):SNSを利用した日本語作文授業の試み—対面教育及び遠隔教育を統合した授業—,高知大学総合教育センター—修学・留学生支援部門紀要,(2),58-72.